

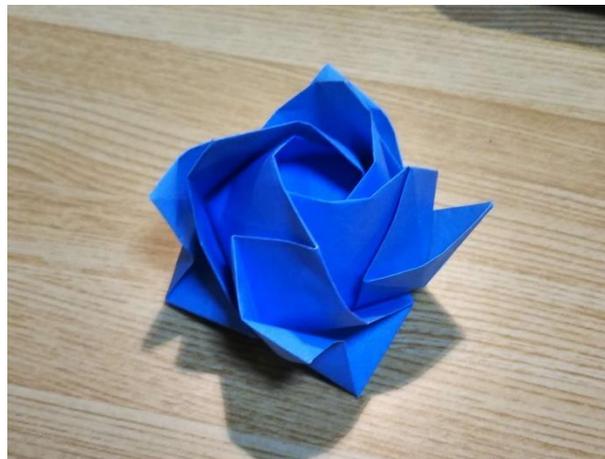
# 過去について

1.

俺たちは「時間」という抽象的な概念をいつの間にか獲得している。「時間」は「客観」的なものとして把握され、単線的に進み、「過去」「現在」「未来」に分類される。こんなことは言わなくてもわかっていることだ。俺たちの「現在」において、それは常識なのだから。

脱イデオロギー化された自然科学的な「時間」概念は、空気のように、日常生活に充満している。普段は特に意識することはないけれども、それがなくては俺たちの日々の行為は立ちいかない。そのことは、列車の時刻表が時空間をいかに精密に秩序付けているかを省みるだけで十分かもしれない。近代の発明品である「機械時計による時間測定の均一性<sup>1</sup>」は、実際、恐ろしいまでに有用だ。経験を、行為を、想像力を、時間軸に沿って整列させることで、俺たちは様々な現象に対する体系的な理解、反省、予測を得ることができる。

しかし、直進する「時間」概念は、ときに、自らの経験の理解に深刻な形で亀裂をもたらす。それは特に、「現在」を構成する「過去」の意味を解釈しようとする際に生じる亀裂のことだ。自分自身の「過去」を巡る位置づけ、解釈、あるいは直覚。このプロセスにとって、経験の単なる時系列的な把握は、どうにもそぐわないように思われる。それはおそらく、俺自身の経験の「リアリティ」とそこから湧出する「倫理」の両方を、ためらわずに忘却するものなのだ。



## 【画像説明】

青い折り紙で折られた薔薇が写真の中央に移っている

---

<sup>1</sup> アンソニー・ギデنز、【訳】松尾精文・小幡正敏、『近代とはいかなる時代か？ モダニティの帰結』、1993、而立書房、p.32

## 2.

そこでは過去と現在が混淆している。誰かに呼びかけられ、侵入される。  
経験のリアリティはリフレインする。

俺の考えとは別の領域から、他者性がやってくる。思考の命令が打ち立てた過去と現在の秩序に対して、親しい者、抑圧された者、死者、いまださだまらぬ何ものかが「もう一つ別の命令をもつ表面として近づいてくる<sup>2</sup>」。自らが引き裂かれるような身震いに遭遇する。

経験のリアリティはリフレインする。

俺はその地点にどうにか止まろうとする。破断の契機に身を浸そうと試みる。その度に、巨大な機械がぬうっと現れ、意識と無意識の両面から時系列を統御するべく攻撃をしかけてくる。この機械は、資本-国家の戦争機械である。この幽鬼に抗しなければならない、と思う。

経験のリアリティはリフレインする。



### 【画像説明】

フルフェイスヘルメットをかぶった人物の肩から上が写真の中央に移っている。顔はヘルメットに覆われていて見えない

※この人物はともだちに誘われてサーキット場に来た俺

## 3.

日常生活において、自分がよって立つ根本的なものの考え方や感受性が、長い時間をかけて決定的に変容していくことがある。連続と断絶が入り混じったこのプロセスの中で、変容に

---

<sup>2</sup> アルフォンソ・リンギス、【訳】野谷啓二、『何も共有していない者たちの共同体』、2006、洛北出版、pp.56-57

とって印象的な過去がしばしば想起される。印象的な過去は、変化の直接的な原因でなくてもよい。現在と過去を時系列に配列する役目を果たせるならば、それで十分なのだ。

だが、その配列は、他者性による侵入や侵入による「主体」の破断を奪い去ってしまう危険がありはしないだろうか。俺にとって決定的な重要性を持った諸経験のありようを、現在という覇権的な地点からピン止めしてしまうことになりはしないか。現在と過去との関係を固定化させる営みは、今ここにある現在と過去の融解を逆説的にも締め出しかねないのではないだろうか。

#### 4.

印象的な過去として、俺はポーヴォワールの『第二の性』の読書会での出来事をよく思い出す。俺が大学の学部生だった時のことだ。当時在籍していた研究室ではフェミニズムの研究が盛んで、同回生たちも積極的にフェミニズムに触れていた。同回生の中で、俺だけがシスヘテロ男性だった。

研究室にいた最初の二年間、俺は正直、フェミニズムに興味がなかった(そもそも、大学における「研究」というものに興味なかったのだが)。そんな感じだったので、研究室で開かれていた『第二の性』の読書会に参加した経緯も全然思い出せない。誰が主催していたんだっけ？誘われたんだっけ？それとも自分からなんとなく参加したんだっけ……？それすらも忘れてしまっている。

ただ、次のことは覚えている。読書会の二回目に参加したこと、同回生の Yさんと院生の Kさんと教員の Hさんがいたこと、俺が序章を読んで担当した箇所のレジюмеを作って配ったこと。緩い雰囲気を読書会だったから、気張ったレジюмеではなかった。俺なりの「ユーモア」も交えて、率直な感想を書いたつもりだった。俺は軽い気持ちで発表した。

「ポーヴォワールって息を吸うように男を罵倒するな(笑)」

#### 5.

院生の Kさんがおもむろに口を開いた。

「どうしてこれを罵倒されたように感じるんですか？」

Kさんは普段から無表情で声のトーンにも抑揚がなく、何を考えているのかわかりづらいのだが、それでもこれが批判の調子であることはすぐに察した。「あ、何かまずったな」と反射的に思った。ただ、間違えた理由はそのときはよくわからなかった。冗談のつもりで放った言葉に、予想外の反応が返ってきた。

「どうしてこれを罵倒されたように感じるんですか？」

……いやー、なんででしょうね。へはは……。脇汗。他者性は俺の考えとは別の領域からやってくる。それはKさんが示したような、言語的な内容と非言語的な態度がないまぜになったものとしてやってくるかもしれない。とにかく、他者性は侵入してくるのだ。思考が打ち立てた過去と現在の秩序に対して。そしてその侵入は、「このようなものである」と俺が想定しようとす

る秩序の外郭を常に破碎する。俺自身という秩序、「主体」という抽象化、あるいは、過去と現在という時制の直列に対しても。

経験のリアリティは時制が混淆する場所でリフレインする。

「どうしてこれを罵倒されたように感じるんですか？」



**【画像説明】**

木製の机の上に置かれたドラゴンフルーツジュースが中央に移っている写真。グラスには白いジュースが注がれており、ストローが刺さっている。半分に切られたドラゴンフルーツがその断面を上にしてグラスの口をふさぐように置かれている

6.

なんかかんやあって、俺はフェミニズムを勉強するようになっていた。Kさんの発言が直接的なきっかけになったというわけではない。それでも、似たような経験が積み重なったのは確かだった。侵入されて、それまでの秩序ではどうにもならなくなって、信を置いてきた主要なものを取り替えなければならないと感じるような他者性が折り重なったのだ。いつまでも安定しない切実さの坩堝に、身を浸すように迫られたのだ。

取り替えなければ。そのために学ばなければ。これまでの「過去」を反省しなければ。あと少しだけ言葉を尽くさねば。変容は特定の方向を志向するようになる。連続と断絶が入り混じるプロセスが進行する。しかし、恐ろしいことに、時間の配列化はこのプロセスの中でも生じうるものなのだ。

7.

フェミニズムに侵食されると、今まで視界の端に留めていた出来事が全く別の様相を持って

迫ってくるようになる。SNS でのアンチ・フェミニズムの悲惨さ、政治・経済・教育・福祉に張り巡らされた非対称的な権力関係、隠蔽され続ける差別と暴力、抑圧された者と殺された者、フェミニストたちが発してきた数々の言葉、同回生のYさんが家父長制に対して向ける怒り、「どうしてこれを罵倒されたように感じるんですか？」……。

いったいなんで俺は今に至るまでこれらのことを考えないでいられたのか？ そう問わずにはいられない。Kさんに、Yさんに、死者に、抑圧されたものに、まだ知らない誰かに、侵入され、揺さぶられ、自分の内実が破断する。だからこそ猛省はほぼ反射的に行われる。言い訳ばかりを携えて、俺は過去に直面させられる。振り返りたくもない。でも、振り返らねばならない。急かされるがまま、俺は過去を位置付けようとする。整列しようとする。不可避的な変容の経験について、必死に構造化を試みるのだ。

8.

批判なのか、後悔なのか、言い訳なのか。「権力の非対称性を全く理解していなかった」「フェミニズムが置かれている現代的な状況に対して無頓着だった」「怒りと抵抗が持つ意味についての知識も想像力もなかった」「実にシスヘテロ男性的なものの見方をしている」「トランス差別的な言説を受容してしまっていた」「インターセクショナリティに意識的ではなかった」。

翻って、「現在」はどうか？ きっと「過去」を踏み台にして、もう少し前向きな反省の弁が語られるだろう。「俺はフェミニズムをもっと学ぼうと思う」「俺はすべての差別と暴力に反対する者たちと連帯したい」「自分の中の偏見や至らない点はなくなるかもしれないけれど、以前に比べたらちょっとくらいは緩和されたはずだ」

これはまっとうな反省だろうか？ おそらくそうだ。過去と現在の関係が批判的な観点を通じて固着化していくことを除けば。真摯な反省から生じる固着化は、悲しいことに、過去における経験のリアリティと現在におけるリアリティの契機の双方を刈り取ってしまいかねない。

9.

確かに、自らを批判してはいるのだが、その一方で、安定的な「主体」が打ち立てられてもいる。過去の振る舞いを、フェミニズムを学んだ現在の視点から対象化し、批判するべきものとしてのみそれらを抜き出す。シスヘテロ男性的な側面を意図的に抽出して、俺は自分自身を戯画化する。過去のマッチョな点を繋ぎ合わせて、色とりどりの批判的自画像を点描する。まるでそれがかつて実在したかのように。それ以外の解釈の余地を残さないように。

そして、その批判作業を通して、なんと現在の俺は安定的な振る舞いの「型」を習得するようになるのだ。つまり、俺はシスヘテロ男性的な要素に自覚的かつ批判的な視点を持ち合わせた「主体」として現在の自分を思い描くことができるようになるのである。三つのことが順不同で実行された。現在において批判的な「主体」が創造された。過去の経験は、批判される振る舞いとして客体化された。批判されるべき過去と、批判するべき現在が、時系列に沿って配置された。

要するに、現在と過去の関係はピン止めされたのである。



【画像説明】

停車した車の下部と地面の隙間に三毛猫が上半身をうずめている写真。コンクリートの床に三毛猫の両脚としっぽが映っている。画像はややピンボケしている

10.

経験のリアリティは関係性の固着化に抗する領域で発生する。時間と「主体」を破碎する。直面させられるのはその地平においてなのだ。経験のリアリティは、実によくなじんだ「俺」という意識と無意識の行為体を、普遍性を志向する行為体の想定を粉々にする。他者性の侵入による「主体」の致命的な破断は、諸経験を配列しようとする時系列の秩序を必ず妨害する。経験のリアリティはそのようにしてリフレインする。直面させられるのはその地平においてなのだ。過去と現在が絶えず混淆し、「人称」が引き裂かれる契機において。

批判的な「主体」の創造、批判すべき過去の客体化、そしてそれらの時間軸上の配列は、批判を呼び覚ました過去の侵入と批判を呼び覚ましうる現在の破断の双方を退けてしまう。過去と現在の関係を、「批判する現在」と「批判される過去」に固定することを通じて、時系列が入り乱れ、「主体」が壊滅した「過去」のリアリティを忘却してしまう。現在の批判的な眼差しと過去の客体的な再構成は、時間測定の一貫性を確保し、眼差す「主体」を反作用的に安定させることで、現在のリアリティを喪失する。経験のリアリティは、もはやリフレインしなくなる。

11.

「主体」の安定化や、過去と現在の関係性の固着化は、はたして批判すべきことなのだろう

か？ そもそも経験のリアリティに対して「リフレイン」などというなまやさしい形容を用いることは、強迫的に訪れる過去の暴力性を等閑視してはいないだろうか？ 俺が批判したような過去と現在のある種の「ストーリー化」は、そのような暴力的な過去を生きる上で、むしろ必要とされる過程なのではないか？ 断片的な過去を生活の語りの中に統合し、再構成することは、ある者の生存にとっては不可欠な所作領域なのではないだろうか<sup>3</sup>？

俺はそのタイミングであられる「ストーリー化」については、まったく否定しない。また、そのタイミングで「リフレイン」という形容を用いることが適切だとも思わない。したがって、経験のリアリティの「リフレイン」が、あらゆる「ストーリー化」を批判しうるわけではない。

12.

しかし、「ストーリー化」は「主体」を根底から揺さぶるような経験を時系列順に秩序付け、現在における「主体」を再構成することが可能であるがゆえに、自らの経験がリフレインする契機を前もって締め出してしまうかねない危険性を常にまとっている。加えて、俺が侵入され破断させられたあのリフレインは、経験のリアリティにおける決定的な要素であったし、俺はその感触を取りこぼさないでいたいと思っている。

だから今の俺は、他者性の侵入そのものの可能性を遮断するような時間と「主体」の再構成から距離を保ちたいと思う。俺は侵入の契機に止まり続けたいと思う。フェミニズムが促した反省から何かを始めようとするならば、俺はその地点から始め続けるべきだと思うのだ。あるいはそれは、俺にとって「倫理」と呼ぶべきものなのかもしれない。

批判的な「ストーリー化」は過去と現在を固定的で単線的なものとして配置する。「過去」を、「現在」を、飼いならそうとしているのだ。しかし、経験のリアリティはリフレインする。よそよそしく、不安定に。そこでは過去と現在は交錯する、交雑する、混淆する。時系列はいつしよくたになっている。全てが同時にやってくる。俺はそこに、せめてとどまり続けようとする。「なぜこれを罵倒されたように感じるのですか？」。

13.

「主体」とも呼べない破断した俺が、今ここにおける過去の直覚や他者性に直面し続けようとするとき、その試みに対して敵意をむき出しにする機械がある。この機械は、資本-国家の戦争機械である。資本-国家の戦争機械は、不安定でためらい続ける「主体」に容赦はしない。時間の混淆など許容するはずもない。

資本が仕掛ける戦争は、「人間的なものや非-人間的なものを価値の生産に従属させること

---

<sup>3</sup> 外傷のストーリーを再構成することの重要性については、ハーマンが『心的外傷と回復』の第九章で述べた以下の「ストーリーを再構成する」と「外傷性記憶を変貌させる」の箇所を想定している。

を基盤とし目標としている<sup>4</sup>」。それゆえに資本は、リフレインの渦中にある「主体」以前のなにものかが従属から「革命へと逆転しかけるときに敵を見いだすのである<sup>5</sup>」。

戦争による支配は、例えば、俺たちの「消費」行動を通じて行使される。資本が「日常生活を植民地化してきたのは、消費の領域<sup>6</sup>」なのだ。美味しい食事、華やかな装飾、軽快な音楽、知的な書籍、素敵な関係。もしくは、ポップで、ジャンクで、セクシュアルで、アングラで、スプラッターでもあるような「文化」的な代物たち。めくるめくスペクタクルな気休めたち。それらがなければ、俺たちは冗談抜きに生きてはいけないうらう。資本が戦略を張り巡らすのは、そのような領域なのである。



**【画像説明】**

ネイルシールを張った右手が何かをつかむような形でネイルを強調している写真。五本の指にはネイルシールにはそれぞれ異なる細かな模様がちりばめられている

※この右手は俺の右手

14.

資本の戦争が生じ続けている「消費」は、過去と現在の関係を徹底的に秩序付ける。俺たちは、「無知で偏見に満ちた状態から、やがて正しいことが認識されていく過程として<sup>7</sup>」描かれた「歴

<sup>4</sup> マウリツィオ・ラッツァラート、【訳】杉村昌昭、『資本はすべての人間を嫌悪する ファシズムか革命か』、2021、法政大学出版局、p.74

<sup>5</sup> マウリツィオ・ラッツァラート、前掲書、p.74

<sup>6</sup> ガルギ・バタチャーリヤ、【訳】稲垣健志、【諸言】小笠原博毅、『レイシャル・キャピタリズムを再考する—再生産と生存に関する諸問題—』、2023、人文書院、p.288

<sup>7</sup> 立岩真也、『私的所有論』、2013、生活書院、p.498

史」を拒絶する習慣を身に着けているが、そのことはかえって、資本が差し出す「歴史」に対して無防備になる流れに掉さしている。戦争機械は時間の隙間に入り込み、俺たちが死者と抑圧された者を忘れ続けるように、その戦略を遂行する。

「帝国主義と植民地化の支配は、紆余曲折を経ながらも20世紀後半を通じて縮小したのだ」という認識はかくも魅力的だ。また、「規律権力」の浸透を確認する営為が、一足飛びに「直接的な暴力の機会そのものが減少した」という発想を引き起こすのは、あまりにもたやすいことだ。

俺はどちらの認識にも与しない。それは今ここにある暴力と、今ここにはない暴力と、俺たちに行使される戦争と、死者と抑圧された者と、いまださだまらぬなものかを忘却し続ける位相で成立するものだからだ。暴力と忘却の秩序を生み出す国家を、暗黙のうちに肯定するものだからだ。

15.

資本は命じる。「政治的な問題は、国家という政治的秩序の範囲で解決せよ」。具体的に言うならば、代議制「民主主義」によって。代議制は俺たちを「国民」となるべく脅迫する。「主体」も時間も、そのための要素に位置付けられるのだ。「国民の本質」は、「すべての個人が多くのもを共有していること、それと同時にすべての個人が多くのもを忘れていないこと」にある<sup>8</sup>。俺たちは忘れ去らなければならない。商場知行政も、琉球併合も、賤民解放令も、委任統治区域も、重慶爆撃も、オスロ合意も。

「国民」でなければよいのだろうか？ もし、「国家」を必ずしも前提としない「人民」であるならば、俺たちはその政治的脅威から身を引きはがすことができるだろうか？ 自らを精密に抽象化された存在として、「個人」の集合へと連れ戻すことに成功するのだろうか？ その先行きが芳しいとは俺には思えない。というのも、「近代の代議制デモクラシーの担い手なる民衆とは、その起源を論理的に不透明にしてしまう解釈的な暴力を通じてかたちをあたえられている<sup>9</sup>」からである。「人民」は、依存に対する憎悪と、理性的な判断による専制と、経済的選択の貫徹と、人格への普遍性を統合することで、あるときは大胆に、またあるときはより巧妙に、戦争を再活性化させる。忘却と上塗りを遂行する。痕跡すら残さぬ者たちを蹂躪しながら。

いったいどうすればいいのだろうか？ 経験のリアリティはリフレインする。他者性は侵入してくる。打ち立てられた「主体」は常に破断する。呻きと身震いに引き込まれる。その地点にとどまろうとする。過去と現在が混淆している。すかさず、資本-国家の戦争機械が「起源にも終末にも暴力をまといつかせた、あの法秩序<sup>10</sup>」と統御された時系列の把握を強制する。政治的

---

<sup>8</sup> エルンスト・ルナン、【訳】長谷川一年、『国民とは何か』、2022、講談社学術文庫、p.15

<sup>9</sup> イェンス・バーテルソン、【訳】小田川大輔・青木裕子・乙部延剛・金山準・五野井郁夫、『国家論のクリティーク』、2006、岩波書店、p.62

<sup>10</sup> ヴァルター・ベンヤミン、【訳】野村修、「暴力批判論」、『暴力批判論 他十篇』所収、1994、岩波文庫、p.47

想像力と可能性は植民地化され、経路付けられる。

16.

過去が「歴史」として現在との関係を取り結ぶにあたって、俺たちが資本と国家に歩み寄った「歴史」を強固にしたり、権威主義的な「歴史」法則を希求したりするのは、無理もないことかもしれない。そこには切迫した動機がある。国家主義者と共謀し続ける新自由主義の攻撃にさらされて、俺たちは「歴史」の危機への早急な対応を迫られているのだ。日本に限っても、「新しい歴史教科書をつくる会」(1996年結成)を参照点とする歴史改ざんの攻勢は、安倍晋三を筆頭に多数の政治家と差別主義者の支持を取り付けている。日本軍「慰安婦」や南京大虐殺、ホロコーストの否定はいったいあと何度繰り返されるのだろうか？

現在の「歴史」の危機に対して、実証主義的歴史学が召喚されるのは必然的であるように見える。社会的な危機に対する集合的知識の正当な源泉として、実証主義的な「歴史」が重視されるようになったのは随分昔のことだが、俺たちもその影響を受けないではいけない。事実と論理に基づき、実存を消し去ろうとする動きに抵抗することに、どうして連帯しないでいられるだろうか？

他の手立ても考えられるかもしれない。実証主義的歴史学と並んで、唯物史観は俺たちの「歴史」に対して多くの刺激を与えてきた。唯物史観は資本主義の「歴史」的一形態である新自由主義に反旗を翻す。集合的な過去を、現在における未来への革命的可能性に開放することができるようになるのだ。まぎれもなく、現在は「過渡期」である。少しずつ、ほんの少しずつではあっても、俺たちは抵抗の果実を実らせている。反撃の狼煙はそこにある。



【画像説明】

黄色い葉がついた木を写した写真。木の一部分が映っており、背景にはわずかに青空が見える

17.

だが、俺はどちらの「歴史」にもコミットしきれない。俺には、「実証主義歴史学」にも「唯物史観」にも、リフレインする経験のリアリティとそこから湧出する「倫理」を捉える契機を見出しがたい。「事実」と「論理」、あるいは「過渡期」と言った認識は、侵入される過去、現在の破断、他者性へのとどまりを致命的な形で排除してしまいかねない。合理性の正当な反論が、「移行期」へと与する希望が、リアリティとその「倫理」を根こそぎにする機会を提供するならば、俺はそれらからは距離を取りたいと思う。

18.

俺のこのような態度は、新自由主義の圧力に屈してしまったことになるのだろうか？ つまり、集合的な「歴史」の防波堤が求められているというのに、「消費」になだめられ、「個人」的で「非政治」的な範囲でしか死者との関係を築けなくなったということの意味しているのだろうか<sup>11</sup>？あるいは、そうかもしれない。

俺は、「歴史」が新自由主義による「非政治」的な経路付けも含めて、より局所的なものとして扱われるようになっていく潮流の中にいる。その流れは、「歴史」が必然的な展開を持たないという含意を共有している。「歴史」法則の拒絶は、権威主義的な唯物史観への反省から、俺たちが学んだ重要な認識のひとつなのだ。

しかし、このような局所化する「歴史」は、ここ数十年の政治学と同じように、あまりにもしばしば、「惑星規模で確立し始めた国民国家秩序の内部の民主主義的共同体こそが、不可触の政治的地平としてあらかじめ設定されること<sup>12</sup>」に対して親和的であった。局所化する「歴史」はまた、ここ数十年の哲学と同じように、「こうした共同体の包摂と排除の操作に追加される倫理学を提供する役にとどまりかねなかった<sup>13</sup>」。このような経緯がある上で、「個人」へと囲い込まれていく「歴史」を警戒することには、十分な理由があるのだ。俺の態度は実際、そのような警戒に値する。

19.

それでもなお、俺が諸経験のリアリティに固執するのは、侵入と破断の地平を含みこんだ想像力の現働化を、痕跡の消去に向かってためらいがちに発される身震いを、過去と現在の絶

---

<sup>11</sup> この記述については、エンツォ・トラヴェルソがフランソワ・アルトークによる「現在主義的」な歴史性を説明した箇所を想定している。

エンツォ・トラヴェルソ、【訳】宇京頼三、『一人称の過去—歴史記述における〈私〉』、2022、未來社、pp.164-165

<sup>12</sup> ギョーム・シバルタン・ブラン、【訳】上尾真道・堀千晶、『ドゥルーズ＝ガタリにおける政治と国家 国家・戦争・資本主義』、2018、書肆心水、pp.341

<sup>13</sup> ギョーム・シバルタン・ブラン、前掲書、p.341

え間ない往還を不安定な形で再政治化し続ける契機を、どうしても取りこぼしたくないからである。それらが資本と国家に蜂起する形で立ち現れ、「歴史」あるいは「過去」を引き裂いていく可能性とプロセスに止まり続けたいと思うからだ。連続と断絶に身を浸りたいと切実に願うからだ。

俺にとってそれは「倫理」と呼ばれるべきかもしれないものだ。そうであるならば、この「倫理」は、局所的な過去を集会的なものに対して開いていく政治的な展開を、積極的に引き受けることになるだろう。そして俺たちの過去は、新自由主義的で「個人」的で「非政治」的な「歴史」観に対して、必ず拒絶と抵抗を示すだろう。

「ナショナル・ヒストリー<sup>14</sup>」は唾棄すべきである。他者性と俺自身が、抑圧され、殺され、忘れ去られる地点だからである。実証主義的歴史学も唯物史観も不十分である。経験のリアリティにおける侵入を巧妙に排除するからである。新自由主義に与することに警戒を怠るな。それはあまりにもありふれた諦念と失望なのだから

資本と国家に抗する瞬間は、現在地点は、いかにして可能になるだろうか？ 過去が持つ意味をめぐって、俺はその煩悶を突き付けられ直面させられてばかりいるのだ。

20.

結局のところ、俺が言おうとしたことは、八十余年も前にベンヤミンが残した記述を繰り返しただけなのかもしれない。ただそれが、俺といまださだまらぬなものかにとって、何かしらの破断を含んだ反復であってほしいと願っている。「抑圧された人びとの伝統は、いまわたしたちの生きている〈例外状態〔非常事態〕〉が、じつは通例の状態なのだと教えてくれる。この教えに応えるような歴史の概念を手に入れるよう、わたしたちは迫られている<sup>15</sup>」。

---

<sup>14</sup> 一九世紀のヨーロッパにおいて、科学信仰とナショナリズムの受容を背景に成立した歴史学のこと。特徴として、「国民国家の成立・確立・強化に貢献するナショナリズムの色彩を帯びたナショナリズム史観、国家を分析の単位かつ歴史のアクターとする一国史観、そして全国政治や国際政治などいわゆる大文字の政治を主要なテーマとする政治史中心史観を特徴とする『ナショナルスティックで一国史的な政治史』が挙げられる。

【編訳】小田中直樹、『歴史学の最前線 〈批判的転回〉後のアナール学派とフランス歴史学』、2017、法政大学出版局、p.4

<sup>15</sup> ヴァルター・ベンヤミン、【訳・評注者】鹿島徹、『[新訳・評注]歴史の概念について』、2015、未来社、p.53



【画像説明】

こけし型のマトリョシカがジグザグに並んだ写真。大きさの異なる五体のマトリョシカが映っている。写真の前には小さいマトリョシカ、写真の後ろには大きいマトリョシカが配置されている。すべてのマトリョシカの腹部や頭部にそれぞれ異なる赤い植物の模様があしらわれており、髪は前部と側面を残す形でこけしのように切りそろえられている。4つのマトリョシカの表情はそれぞれアンニュイに見える

21.

あと言い忘れてたけど、天皇制滅びろ。

(2024年3月1日)

## 【参考情報一覧】

- ・【編訳】小田中直樹、『歴史学の最前線 〈批判的転回〉後のアナール学派とフランス歴史学』、2017、法政大学出版局
- ・立岩真也、『私的所有論』、2013、生活書院
- ・イェンス・バーテルソン、【訳】小田川大輔・青木裕子・乙部延剛・金山準・五野井郁夫、『国家論のクリティーク』、2006、岩波書店
- ・ヴァルター・ベンヤミン、【訳】野村修、『暴力批判論』、『暴力批判論 他十篇』所収、1994、岩波文庫
- ・ヴァルター・ベンヤミン、【訳・評注者】鹿島徹、『[新訳・評注]歴史の概念について』、2015、未来社
- ・ガルギ・バタチャーリヤ、【訳】稲垣健志、【諸言】小笠原博毅、『レイシャル・キャピタリズムを再考する—再生産と生存に関する諸問題—』、2023、人文書院
- ・アンソニー・ギデنز、【訳】松尾精文・小幡正敏、『近代とはいかなる時代か？ モダニティの帰結』、1993、而立書房
- ・ジュディス・L・ハーマン、【訳】中井久夫、『心的外傷と回復』、1999、みすず書房
- ・マウリツィオ・ラッツァラート、【訳】杉村昌昭、『資本はすべての人間を嫌悪する ファシズムか革命か』、2021、法政大学出版局
- ・アルフォンソ・リングス、【訳】野谷啓二、『何も共有していない者たちの共同体』、2006、洛北出版
- ・エルンスト・ルナン、【訳】長谷川一年、『国民とは何か』、2022、講談社学術文庫
- ・ギョーム・シバルタン・ブラン、【訳】上尾真道・堀千晶、『ドゥルーズ＝ガタリにおける政治と国家 国家・戦争・資本主義』、2018、書肆心水
- ・エンツォ・トラヴェルソ、【訳】宇京頼三、『一人称の過去—歴史記述における〈私〉』、2022、未来社